様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　４月２１日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2011
課題番号：20720105
研究課題名（和文）　中世ロシア語文献における教会スラヴ語的要素の用法の変遷

研究課題名（英文）　On the usage of Slavonisms in Old Russian texts

研究代表者
丸山　由紀子（MARUYAMA YUKIKO）
東京外国語大学・外国語学部・研究員
研究者番号：２０４０１４３２

研究成果の概要（和文）：本研究では教会スラヴ語的要素の一つである双数形に焦点を当てて分析を行った。その結果、15 世紀にロシアで成立したオリジナル聖者伝において、双数形の使用が想定されうる文脈における双数形（教会スラヴ語的要素）と複数形の使い分けは、語彙・文法的要因だけでなく、作品における各エピソードをより効果的に伝えるという作者の意図によっても決定されることが判明した。すなわち、教会スラヴ語的要素の用法に関する研究では談話的要因を考慮する必要があることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate the usage of dual forms, one of the typical slavonisms. In the Russian original hagiographies of the Fifteenth century, dual forms (slavonism) and plural forms were chosen according to the grammatical and lexical-grammatical factors, but in considerable cases, the choice was made strategically as well in accordance with the characteristic of the episode. This viewpoint makes it evident that the pragmatic factor must also be taken into consideration in the studies of the usage of slavonisms.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：中世ロシア語、15 世紀、双数、聖者伝、教会スラヴ語的要素

１．研究開始当初の背景

中世ロシア語において、生きた文法カテゴリーとしての双数は、民衆の言葉が良く反映されている白樺文書から判断すると、13 世紀頃と推定される。これまで、ロシア語における双数研究は、その話し言葉における消失過程と時期の解明を主眼としていたため、11－14 世紀の文献を対象とした研究がほとんどであった。しかし、双数形そのものは、ロシア教会スラヴ語を指向する文献においては、教会スラヴ語的要素の一つとして中世ロシア語期を通して（17 世紀末まで）使用され続けた。

15－17 世紀に成立した文献における双数形

の使用に関しては、これまでにも O.N.キヤノヴァ、M.L.レムニョーヴァ、V.M.ジボフらの研究があった。ただし、前者二人に関しては文法・語彙の観点からのみの分析、ジボフに関しては高尚な文体であることを示すために所々で使用しているとの説明にとどまっていた。また、3 者とも、双数形の使用が想定される箇所をすべて抽出し、双数形と複数形の使用分布の傾向とその選択基準を明らかにするという作業は行っていなかった。さらに、申請者は博士論文（1999 年）で研究対象とした『貴族夫人モローゾヴァの物語』における双数形の用法を分析した結果、モスクワ・ルーシ時代（15－17 世紀）の文献における双数形の用法に関しては、談話的観点を導入することが不可避であることが明らかとなったが、この点を考慮した研究もほぼ皆無であった。本研究では、ロシア語史研究における空隙を埋めるべく、この時代の双数形の用法を詳細かつ全面的に調査することとした。

２．研究の目的

中期ロシア語（15－17 世紀）文献について、教会スラヴ語的要素の一つである双数形の用法を詳細に分析することで、話し言葉に基盤を持たない言語形態が書き言葉においていかに継承・変容されるか明らかにする。

３．研究の方法

（1）中期ロシア語期におけるロシア教会スラヴ語の特徴を明らかにするため、この時期にロシアで新たに執筆された文献を調査対象とする。

（2）分析対象ジャンルとしては 15 世紀に成立した聖者伝とする。このジャンルは教会スラヴ語で書くことを旨とし、古風な言語形態が保たれていること、ただし教会文献としては、例えば聖書などと比べて書き手の自由があること、がその理由である。本研究では 15 世紀を代表する二人の文筆家エピファニィ・プレムードルィとパホーミイ・ロゴフェートを取り上げ、前者の作品『ペルミのステファン伝』『ラドネシのセルギイ伝』、および後者による『ラドネシのセルギイ伝』の新たな諸編集版を調査対象とした。

（3）言語的特徴をより正確に把握するため刊本ではなく、写本を使用する。刊本では写本中の略語、綴りを正確に反映せず、現代人に読みやすく直すことが多いが、それにより、写本における語尾形態が正確には分からなくなることがあり、言語研究には適さない。

（4）双数形の使用が想定される箇所をテクストからすべて抽出し、全数調査を行う。

（5）得られたデータを文法・語彙レベルとテクストレベルの 2 段階で分析する。

４．研究成果

エピファニィ・プレムードルィ執筆の『ペルミのステファン伝』『ラドネシのセルギイ伝』における双数形の使用に関して、次のことを明らかにした。

（1） ペアをなす身体部位を表す名詞は、語彙によって双数形・複数形の選択が決まる。「両親」を表す名詞は、主格では常に複数形、斜格では双数形・複数形どちらの使用も認められる。

（2） （1）以外の名詞に関しては、個数詞 2 と結合する場合は双数形、結合しない場合は複数形で示される。

（3） 1・2 人称代名詞は、主格では常に複数形、斜格ではどちらの数形態も使用される。動詞の 1・2 人称も、双数形・複数形どちらの使用も認められる。

（4） 修飾語は、被修飾語が双数形であれば双数形、複数形であれば複数形で示される。

（5） （3）以外の代名詞は、双数形・両数形どちらでも使用される。

（6） 述語の数形態は、主語によるところが大きい。

① 主語がペアをなす身体部位を表す名詞、個数詞 2 またはそれと結合する名詞で示される場合、述語は原則双数形である。

② 3 人称代名詞で示される場合、述語は複数形である。

③ 主語が「両親」を表す名詞で示される場合、または文中に主語が現れない場合、述語は双数形・複数形のどちらも使用されうる。

④ 独立与格構文では、述語を表す分詞は常に双数形である。

以上は、語彙・文法レベルの分析であり、『ペルミのステファン伝』における双数形の用法は、基本的にこのレベルで説明できる。しかし、『ラドネシのセルギイ伝』はさらにテクストレベルの分析が必要となる。調査の結果、（3）（5）（6）③のケースにおける数形態の分布には談話的要素が関係することが明らかとなった。すなわち、通常の場面ではこれらは双数形で示されるが、聖母、天使などが人間の前に現れる場合（幻視）では、その人間の描写に複数形が使用される。こうすることで作者は神の御使いと人間を対置させ、かつ幻視を他のエピソードから際立たせたと考えられる。

本研究で行った分析はその正確さ、またテクストレベルによる分析の斬新さが高く評価され、その成果を国際的な学術雑誌《Русский язык в научном освещении》にて発表することができた。

パホーミイによる『ラドネシのセルギイ伝』に関しては、第１・３・４編集版および近年発見された直筆原稿（第４編集版に近いとされる）の分析を行った。その結果、特に（６）述語でエピファニイの作品と大きな違いが見られた。

（１） 主語がペアをなす身体部位を表す名詞、個数詞２またはそれと結合する名詞で示される場合、述語は双数形である（この点のみは、エピファニイと同様）。

（２） 文中に主語が示される場合は、述語は常に複数形。

（３） 文中に主語が示されない場合。

① 文脈から主語の人数が判断できる場合、述語は複数形。

② 文脈からは主語を確定することができず、述語形態でのみ判断が可能な場合、述語は双数形。

ただし、（３）②のケースでも、セルギイの死後の奇蹟を描いた箇所では、述語は複数形で示される。

以上の結果から、15 世紀以降に成立したロシア教会スラヴ語を指向する文献で双数形を使用する場合、絶対的に伝統に忠実である範疇と、書き手個人の自由が許容される範疇があることが確認できた。また、後者に関しては、書き手の個性を発揮する場でもあり、すでに話し言葉では失われ、書き言葉でのみ継承される文法形態が、その用法においてどのような変化を被るか、その可能性と方向性を明らかとする素材を提供するとなることも明らかとなった。今後は他の文献の分析を進めることで、この点の包括的解明を目指したい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① Ю. Маруяма. Употребление дуальных форм в житийных текстах старорусского периода: грамматические и лексические факторы, Grammaticalization and Lexicalization in Slavic Languages, pp. 65-67, 2011, 査読有

② Ю. Маруяма, Специфика употребления форм дв. ч. у Пахомия Логофета (на материале Пахомиевских редакций Жития Сергия Радонежского), Древняя Русь. Вопросы медиевистики, №45, pp. 82-83, 2011, 査読有 http://www.drevnyaya.ru/vyp/2011_3/part.pdf

③ Ю. Маруяма, К вопросу о распределении форм двойственного числа в русских житийных памятниках начала XV в. (на материале «Жития Стефана Пермского» и «Жития Сергия Радонежского»), Русский язык в научном освещении, №21, pp. 162-188, 2011, 査読有

④ Ю. Маруяма, Распределение форм двойственного числа в Пространной редакции Жития Сергия Радонежского, Русский язык: исторические судьбы и современность. IV международный конгресс исследователей русского языка. Труды и материалы., p.76, 2010, 査読有 http://www.philol.msu.ru/~rlc2010/abstracts/rlc2010_abstracts_sec02.pdf

⑤ 丸山由紀子、モスクワ・ルーシ時代のロシア語文献におけるスラヴャニズムの使用基準　－『ペルミのステファン伝』『ラドネシのセルギイ伝』にみる双数形の用法－、ロシア語ロシア文学研究、４０巻、1－8 頁、2008 年、査読有 http://wwwsoc.nii.ac.jp/robun/bulletin40.html

〔学会発表〕（計５件）

① 丸山由紀子、Употребление дуальных форм в житийных текстах старорусского периода: грамматические и лексические факторы. Joint International Symposium, “Grammaticalization and Lexicalization in Slavic Languages”, 2011 年 11 月 11 日、北海道大学スラヴ研究センター

② 丸山由紀子、Специфика употребления форм дв. ч. у Пахомия Логофета (на материале Пахомиевских редакций Жития Сергия Радонежского), VI Международная научная конференция «Комплексный подход в изучении Древней Руси», 2011 年 9 月 29 日、ロシア科学アカデミー本館（モスクワ）

③ 丸山由紀子、モスクワ時代初期の聖者伝における双数形の用法－エピファニィ・プレムードルイとパホーミィ・ロゴフェートを中心に、日本ロシア文学会第 60 回研究発表会、2010 年 11 月 7 日、熊本学園大学

④ 丸山由紀子、Распределение форм

двойственного числа в Пространной редакции Жития Сергия Радонежского, Русский язык: исторические судьбы и современность. IV международный конгресс исследователей русского языка., 2010 年 3 月 22 日、モスクワ国立大学(ロシア)

⑤ 丸山由紀子、Особенности распределения форм двойственного числа в русских житийных текстах XV – XVI вв., 2009 俄羅斯語言學暨文學國際論壇、2009 年 11 月 21 日、淡江大學（台湾）

６．研究組織

(1)研究代表者

丸山　由紀子（MARUYAMA YUKIKO）
東京外国語大学・外国語学部・研究員
研究者番号：２０４０１４３２